当院における漢方診療の実際

# 血管外科における漢方的アプローチ

済生会横浜市東部病院 外科副部長(血管外科)
林　忍 先生

1993年　慶應義塾大学医学部 卒業
同　年　慶應義塾大学 外科学教室 入局
1994年　日野市立病院 外科 勤務
1995年　川崎市立川崎病院 外科 勤務
1996年　慶應義塾大学 外科学教室 助教
末梢血管外科学専攻。医学博士号取得。
1999年　済生会神奈川県病院 外科 勤務
2007年　済生会横浜市東部病院 心臓血管センター 血管外科 医長
および消化器センター 外科 医長 兼任
2011年　同院 外科副部長(血管外科担当)

済生会横浜市東部病院は、平成19年に開設した新しい病院である。川崎市に隣接した横浜市東部地区の中核病院として、急性期医療および高度専門医療を担っている。
この病院は内科系と外科系の医師が常に連携して診療にあたる疾患別センター制が導入されている。その中で血管外科では、外科的な治療以外に漢方的なアプローチが取り入れられている。その実際について外科副部長の林 忍 先生にうかがった。

## 一歩先の急性期モデル病院を目指して

当院は横浜市で5番目の地域中核病院として平成19年に開設されました。横浜市東部地区における中核病院としての役割と同時に、横浜市の政策的医療の一環としてハード救急も担う精神科や重症心身障害児(者)施設も併設されています。

当院の特徴としては疾患別センター制が導入されており、患者さんの治療計画を立てるにあたって内科系と外科系の医師が常に連携し、患者さんにとって最善の治療法が提供できるようになっています。消化器センター、心臓血管センター、糖尿病・内分泌センター、こころのケアセンターなど16ものセンターが設けられています。私が担当する血管外科は心臓血管センターに属し、必要に応じ循環器内科や心臓血管外科の医師とも連携を図りながら診療できるようになっています。

## 血管外科診療の実際

血管は人間の体の全ての部位にはり巡らされています。当院の心臓血管センターでは、心臓と胸部大血管については心臓血管外科が担当し、それ以外の全身の動脈・静脈さらにリンパ管を加えたあらゆる脈管に関する疾患については私が担当している血管外科が診療しております。血管外科で扱う疾患は、動脈疾患では腹部や四肢の動脈瘤、急性動脈閉塞症、慢性動脈閉塞症(閉塞性動脈硬化症、バージャー病)、内頸動脈狭窄症、膠原病に伴う血管炎、レイノー症候群などであり、静脈疾患では下肢静脈瘤、深部静脈血栓症、肺血栓塞栓症などがあります。さらにこれら以外にもリンパ浮腫、透析用内シャントの造設さらには先天性の血管形成異常など、実に様々な血管疾患を対象としています。

これらの疾患の治療にあたっては、ガイドラインやエビデンスに基づいたもっとも適切な治療法を選択することは言うまでもありませんが、腹部大動脈瘤や閉塞性動脈疾患では可能であれば患者さんの身体に負担の少ない血管内治療を行うようにしています。

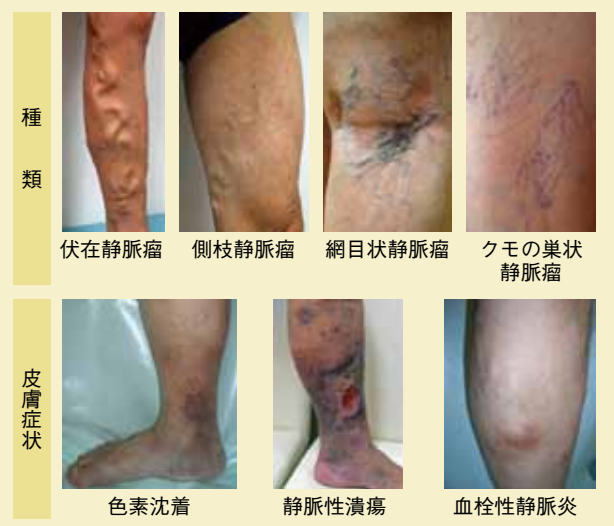
## 血管外科の代表的疾患：下肢静脈瘤

血管外科で扱う疾患は多岐にわたりますが、当院の血管外科で頻度の高い疾患の一つに下肢静脈瘤があります。下肢静脈瘤は、長時間にわたる立ち仕事や妊娠・出産などで下肢の静脈弁に負荷がかかり、静脈弁が機能不全に陥ることから、足の表在静脈に逆流が起こり血管がコブのように変形する疾患です。妊娠や出産が関係することから、女性の発症頻度は男性の3倍程度も高く、さらに加齢とともに増加する傾向があります。

下肢静脈瘤の種類と皮膚症状を**図**に示します。また症状としては、足の循環が悪くなり、うっ滞を起こすので、足がだるい、痛い、重い、むくむ、などの他、冷えやこむら返りを訴えることも少なくありません。さらに進行すると色素沈着や血栓性静脈炎、皮膚の潰瘍を生じることもあります。

しかし患者さんは、静脈瘤の存在には気づいても軽い症状では積極的に受診されることは多くありません。通常は、下肢静脈瘤発症後、長い年月を経て、

図　下肢静脈瘤の種類と皮膚症状




痛み、むくみ、冷えなどの自覚症状が強くなってから、初めて受診されることが多いです。ところがこの時点では、下肢静脈瘤の重症度も中等度から重度に進行していることが多いという問題があります。

下肢静脈瘤と診断した場合、まずは医療用弾性ストッキングの着用を指導します。しかしこれだけで症状が改善するケースは少なく、硬化療法や外科的治療が必要になります。外科的治療としては、静脈高位結紮術、静脈瘤抜去術(ストリッピング術)、レーザー治療などあります。なかでも静脈瘤抜去術は、伏在静脈瘤が良い適応であり、安全性が高く再発が少ないことから当院では積極的に行っています。また、レーザー治療は最近、保険適応となったこともあり、今後、増えていくものと予想されます。とは言え、外科的治療に至るまでの間、医療用の弾性ストッキングだけで患者さんのQOLを維持することは難しく、内科的に症状の改善が期待される薬物治療が望まれていましたが、現実には有用な薬物がありませんでした。

## 下肢静脈瘤の病態は「瘀血」

下肢静脈瘤に限らず静脈血栓症(VTE)や末梢動脈疾患(PAD)は、いずれもその病態は循環障害であり、漢方でいう「瘀血」の病態で、下肢のしびれや冷えなどの違和感が生じると考えられます。事実、このような患者さんに桂枝茯苓丸などの駆瘀血剤を投与すると、下肢のしびれや冷えが改善する症例を以前から経験していました。

そこでこのような症例を客観的に解析するために、下肢静脈瘤の患者さんを対象に桂枝茯苓丸投与前後における自覚症状(冷え、しびれ、かゆみ、痛み、下肢倦怠感)の推移の評価をVASにより行いました。それと同時に、静脈瘤重症度分類であるCEAP分類や皮膚灌流圧、および漢方医学的瘀血の評価基準である瘀血スコアの推移の観察も行い、症例を集積しました。

結果は今後詳細に解析して報告の予定ですが、桂枝茯苓丸(6g分2)の12週間投与で、VASで評価した自覚症状のほか瘀血スコアの有意な改善を認めました。さらにCEAP分類や皮膚灌流圧についても改善を認めました。これらのことから、下肢静脈瘤の自覚症状と「瘀血」の関係が示唆されただけでなく、静脈瘤の客観的な診断基準である重症度分類や皮膚灌流圧でも改善を認めたことから、桂枝茯苓丸は下肢静脈瘤そのものに対しても臨床的有用性がある可能性が示唆されました。

## 血管外科における漢方診療の可能性

私は日常臨床において、下肢静脈瘤をはじめ、静脈血栓症(VTE)や末梢動脈疾患(PAD)などに伴う自覚症状に広く漢方薬を使用しています(**表**)。

表　血管外科における漢方処方例

| | |
|---|---|
| 冷え、しびれ、だるさ | 桂枝茯苓丸 |
| 強いむくみ | 柴苓湯、五苓散 |
| こむら返り | 芍薬甘草湯 |
| 強い冷え | 当帰四逆加呉茱萸生姜湯 |

血管外科では下肢静脈瘤以外にも漢方薬が有用性を発揮できる分野が少なくありません。たとえば、VTEやリンパ浮腫に対する柴苓湯、レイノー症状に対する当帰四逆加呉茱萸生姜湯などについては、これまでにもいくつか報告があります。血管外科における漢方治療の有用性は、その患者満足度の高さにあります。桂枝茯苓丸の服用により自覚症状が緩和された患者さんは8割近くを占め、しかも「かなり楽になりました」と言われることが多いです。ここまで高い患者満足度は西洋薬による治療では得がたいものであり、患者さんのQOLや満足度を高めることは非常に価値があることです。血管外科領域において漢方薬は、駆瘀血剤をはじめ、幅広い応用が期待できると感じています。今後は血管外科医も、治療の選択肢の一つとして漢方薬をもっと上手く使用していくことが必要ではないでしょうか。